

ナシヨナリズムとユダヤ系思想家

堀 邦 維

「ナシヨナリズムとユダヤ系思想家」というタイトルはある意味で逆説的である。紀元前六世紀のバビロン捕囚以後故国を追われて離散したディアスポラのユダヤ人たちは、どの地にあってもつねに絶対的少数者であったわけであり、ナシヨナリズムが、仮に

領域国家内で文化や歴史を共有するエスニックな集団（ネイション）が育む一体感であるとすれば、両者は相矛盾し両立・共存が非常に難しい関係であるからだ。だが、そうであるが故に、二つの存在は互いの対立概念として、各々の在り様を照らし出す関係でもある。以下では、ユダヤ系知識人や思想家が、近代以降顕在化してきたナシヨナリズムとどう関わり、またそれをどのように見てきたかを瞥見し、現在の状況までも展望してみたい。

一九九〇年代にイギリスの思想史家アイザイア・バーリンが、かつての有力な思想家たちの「誰一人として予言しなかったのは、

今日の全地球的規模でのナシヨナリズムの勃興」であると言っているように、過去においてナシヨナリズムの問題性とその結果を予想することは困難であった。ましてや今日的なナシヨナリズムの諸相を予見することなど不可能に近かったといえるだろう。

一九世紀までさかのばれば、カール・マルクスといえども、全世界の労働者の連帯と比べて民族問題は重要性が低いと見なしていたし、その後の多くの自由主義者も社会主義者もともにナシヨナリズムは衰退するであろうと予想していた。これには、啓蒙主義以降の進歩史観が大きく関わっていたといえよう。結果は歴史に見るようにファシズムやナチズムをもたらし、人類史上最悪の事態を招いた。そして冷戦崩壊後の現在に至っても、ナシヨナリズムは衰えるどころか文化や宗教などの装いをまといながらますますその勢いを増しつつある。

ホロコースト以後つまり第二次大戦後のナショナリズム論としては、ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』（一九五一年）がある。これから扱うナショナリズム論との大きな違いは、アーレントはこの著作において、ナチズムやスターリニズムなどの全体主義と、一九世紀の一般的なナショナリズムとを区別している点である。それにもかかわらず、全体主義の発生のメカニズムを解明する彼女の分析の成果が、今日のナショナリズムを考える上で、重大な示唆を与えていることは異論の余地がない。しかしながら、アーレントはこれまでも多くの研究者により論究されてきたので、ここでは多くを論じない。むしろこれまで、ナショナリズム論としてはあまり取り沙汰されることのなかった欧米のユダヤ系知識人の議論を中心に見ていきたいと思う。

そもそもナショナリズムの高まりを見た一九世紀ヨーロッパのユダヤ人の状況はどのようなものであっただろうか。当時ヨーロッパ・ユダヤ人のあいだでは二つの思潮が多く支持を集めるようになっていた。シオニズムとマルクス主義である。シオニズムは西欧におけるナショナリズムの高まりと連動しないしは対抗して、いわば民族的特殊性を前面に出したものであり、マルクス主義は抑圧からの解放を願いながらも根本において普遍主義的理念に基づく思潮である。シオニズムはオーストリア出身のテオドル・ヘルツルに始まるイスラエル帰帰を希求する運動であるが、主に西欧・中欧の都市に住まう中間階層に浸透した点において、

また他民族に対する自民族の独自性を強調する点において他のナショナリズム運動と共通している。

一方マルクス主義は、運動としては特に東欧・ロシアのユダヤ人の中に広く浸透し、ロシア革命に直接関わる運動の担い手たちを多数生み出す。東欧ユダヤ人の多くが職人層からなるプロレタリア階級と貧しい商人階級によって構成されており、マルクス主義が階級的抑圧と民族的迫害から同時に彼らを救済するものとして受け入れられたためである。実際、ロシア内戦中、ユダヤ人は大挙してトロツキーの指揮する赤軍に身を投じた。赤軍はボグロムすなわち帝政ロシア内でのユダヤ人迫害から自分たちを守る唯一の防衛軍であったからだ。

しかし結果的には、ヨーロッパにおいてもロシアにおいても、「根無し草でコスモポリタン」のユダヤ人は、ナショナリズムにともなう反ユダヤ主義の犠牲になったといえるのかもしれない。ナチズムの犠牲者であったことはもちろんのこと、アーレントも指摘しているように、ロシアにおいてさえ、トロツキーの世界革命論に対して一國社会主義を唱えたスターリンの支配体制の中に、

一種のナショナリズムの反ユダヤ主義の影がなかったとは言えないのである。スターリンは、「ボリシエヴィキがボグロムを組織して、『ユダヤ分子』を片付けるに違いないという、不気味な冗談を好んで繰り返していた」という³。実際、スターリンは粛清の最終段階で、ヒトラーと同様の「ユダヤ人世界陰謀説」を持

ち出し、ソ連とその衛星国でユダヤ人の政治的迫害を行っている。⁽⁴⁾その結果トロッキーをはじめ多くのユダヤ系の革命家や芸術家が犠牲となった。これらの背景には、ロシア・東欧では長年にわたって反ユダヤ主義的キャンペーンが大衆に歓迎され続けてきたという事情もあった。

さてここで、具体的な議論を見てみたいと思う。まずはラトビア生まれのイギリスの思想史家バーリン自身と、ドイツ生まれでナチに追われてイギリスで生涯を終えた社会学者ノルベルト・エリアスの論考である。バーリンは、思想史家の立場から、一九七九年に「ナシヨナリズム——過去における無視と現在の強さ」と題するナシヨナリズム論を書いている。またエリアスは、一九八九年に出版された『ドイツ人論』の中に収められている「ナシヨナリズムについて」と「文明化の挫折」と題する二つの論文（書かれたのは六〇年代）の中で論を展開している。個人的な交わりを持たなかったエリアスとバーリンであるが、両者のナシヨナリズム論はいずれも、ナチズムを生み出したドイツに焦点を当てており、さまざまな着眼点において互いに呼応している。ちなみに両者ともアーレントの議論には言及していない。それだけでなく、バーリンは別のところでアーレントの批判さえしているのである。⁽⁵⁾まずはドイツにおける「国民国家」の成立とドイツ国民の特性についての議論である。エリアスとバーリンは共に次のように見ている。ビスマルクの指導のもと一九世紀後半のドイツでは、中

産階級出身者が急激に力をつけ、貴族階級に代わって国家の指導層に入り込んでいくようになる。このときドイツでは産業化と都市化が急速に進展しており、そのような社会に暮らすドイツ人は、もはやかつての絶対王政のもとの臣民というよりは、都市中産階級を中心とする広い層からなる集団へと変貌していた。国民国家ドイツの黎明期である。自信をつけたドイツ国民は、かつてのナポレオン支配の屈辱を晴らすべく「帝国」すなわち神聖ローマ帝国再現への野望を抱くようになる。しかし、その国民とは「その集団に属する者の大半が互いに知らず、知ることできない集団」であり、マルクスの言い方に従えば、「類的な存在から互いに敵対し合う個的存在」へ移行するという傾向さえ帯びることになる。いみじくもマルクスは、「市民社会は、それ自身の内臓から絶えずユダヤ人を生み出す」と書いた。⁽⁷⁾

互いに無名性を帯びた人間の集団としての国民、この名のもとに政治を遂行するには、それぞれの個人を結びつける感情的な絆が必要となる。つまり、このような「個的存在」を結びつけるための高度に象徴的な紐帯、「祖国」、「故国」、「民族」というような言葉による象徴ないしは非人格的な象徴である、とエリアスは言う。バーリンは同様の視点から、この「象徴」のもとに糾合される集団の意志をドイツのナシヨナリズムと関連づけ、「民族の政治生活をこの集団的意志の表現と捉えることが、政治的ロマン主義——つまりナシヨナリズムの本質である」と言っている。こ

こで芽生えたナショナリズムは、一八七一年にドイツを普仏戦争における勝利へと導き、ドイツ統一を達成した。

さて、ナショナリズムの極端なかたちとして、その後なぜドイツにナチズムが生まれたのか。この問題に関しては、ドイツ人中にあった国民としての「傷」がキーワードであるという点でも、エリアスとバーリンの見方は一致している。ヒトラーが国民に与えた夢、「第三帝国」(Dritte Reich)はドイツ人の「傷」を癒す最大の理想であった。ドイツ語で帝国を意味する Reich は、神聖ローマ帝国の残影を象徴するものとしてドイツ人の記憶のなかに生き続け、過去の栄光を象徴するものであった。しかし、まがりなりに八〇〇年以上も続いた第一帝国(神聖ローマ帝国)は一八〇六年にナポレオンによって崩壊させられ、ビスマルクの成立させた第二帝国も第一次大戦の敗北によって一九一八年に消滅した。このように繰り返し傷つけられた誇りと屈辱感はルサンチマンとして、一九三三年まで続いたワイマール共和国のなかで潜行することになる。ここに、「ドイツ民族のうちで最も不満な集団」すなわちヒトラー率いるナチが、権力獲得のために利用できる素地が醸成されるのである。

しかしここには、産業化された現代社会が抱える一つの大きな問題が横たわっている。つまり増大する大衆の不満とそれを糧としてはびこるポピュリズムの在り様である。民主主義の制度のもとはいかなる政治的決定も大衆の広汎な支持を必要とする。ヒ

トラー政権でさえ民主主義的手続きによって成立したことを、ここでは念頭においておかなければならない。この点に関して、エジプト生まれでイギリス在住のユダヤ人歴史学者エリック・ホブズボームは次のように言っている。ナチズムの発生には、資本主義化の進展にともなう都市大衆つまり中間諸階層の増大とその「社会的地位の不安定さと層としての規定の曖昧さ」が関係している。そのような彼らの状況が不安と劣等感をかき立て、それを克服するために自分たちの民族的独自性と優秀さを主張するという傾向が生まれる。そしてそのような大衆の意向に乗じて、戦闘的ナショナリズムとしてのナチズムすなわち国家社会主義はその標的を、諸外国だけでなく、国内の資本家であり金融業者であり、また同時に国際主義的共産主義者でもあるユダヤ人に定めるというのである。¹⁰⁾

さらに問題としなければならないのは、何故ナチズムが大規模なユダヤ人虐殺すなわちホロコーストにつながったかという点であろう。大戦の真つ只中、数百万のユダヤ人を移送し殺害するのにかかる費用と労力は、合理的にいえば戦争遂行の障害になるはずである。エリアスによると、ユダヤ人絶滅はナチズムのなかにおけるある「信念」のもとに計画された。すなわち、

現在および将来の偉大なるドイツとドイツ民族に最高に具現された「アーリア」人種全体が、「人種の純潔」を求め、その生物学的に考えられた「純潔」が、混血によって人種に危険

を及ぼしかねない「劣等」な人間集団、特にユダヤ系の人間を排除すること、必要なら絶滅することを要求する。⁽¹⁾

ヒトラー個人のユダヤ人に対する消し去りがたい敵意に由来するこのような信念は、ナチズムの運動の過程で、その巧妙なプロパガンダによって大衆の心情へと浸透し、やがて集団の意志へと変化していった。もはやこれを阻止しようにもその流れを止めることは不可能な状態にまで至っていたのである。

以上見てきたように、エリアス、バーリン、ホブズボーム三者のナチズム発生に関する分析は、運動に共感する者たちの心理的メカニズムに焦点を当てている点で共通しているといえる。戦争とナショナリズムに由来する惨劇を政治経済的文脈よりもむしろ国民の感情的側面に重きをおいて説明しようとする姿勢は、これらユダヤ系知識人の特徴といえるかもしれない。なぜなら、彼らが日常的に経験する反ユダヤ主義自体が人間の感情に基づくものであるからだ。

さて、ここでアメリカに目を転じてみよう。ロシアのボグロムとヨーロッパのホロコーストを逃れ生き延びたユダヤ人たちが行き着いた先がアメリカであった。多民族・多人種国家であるアメリカにおいて、ユダヤ系知識人とナショナリズムの関係はどのようなものであろうか。

一七世紀以来のアメリカ文化は、ワスプ (WASP) すなわち、英国系白人でプロテスタントの人々がその主流を担ってきた。し

かし、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて「新移民」と呼ばれる南欧・東欧・ロシアおよびアジアから大量の移民が流入するところから、アメリカ文化が少しづつ変容していく。特に、新移民の大きな部分を占めていたユダヤ人の中からは、アメリカ文化に参入していく知識人たちの一群が目立ち始める。彼らはニューヨークを拠点に活動したので、後に総称して「ニューヨーク知識人」と呼ばれるようになったが、一九五〇年代以降にはアメリカの文化だけでなく政治の分野でも大きな影響力を持つようになる。実は、現在「ネオコン」と呼ばれるブッシュ政権のブレインの多くはこの知識人集団の一部の流れを引いているのである。

しかしボグロムもホロコーストもないアメリカにおいても、当初からディアスポラとしてのユダヤ系知識人たちが居心地良くいられたわけではない。彼らはつねに「アメリカ的なもの」というカテゴリーの外側に位置してきたからである。民族的・宗教的な異質性はもちろんのこと彼らの思考方法までもが、ワスプの伝統からすれば異質なものであった。ヨーロッパ・ユダヤ人の場合と同様にその同化の過程で、彼らは自らの異質性に基づく差別を回避するために普遍主義へ傾倒する。政治的には明確な反スターリン主義的マルキシズム、文化・芸術においてはモダニズムを彼らの思考の根幹に据え、戦後アメリカの知的世界へ参入していった。それにもかかわらず、彼らとアメリカ文化とのあいだの相互的な違和感は根強かった。ニューヨーク知識人の一人で文芸批評家で

あるアルフレッド・ケイジンは次のように回想している——「当時、わたしは自分がすべてのもの外に立っており、永久に異邦人であり続けるのではないかという気がした。(中略)自分はまだアメリカの外部にいる人間なのだと感じていたのである」¹²⁾。

古きアメリカの伝統は、歴史学者リチャード・ホフスタッター(ニューヨーク知識人の一人)によると、ピューリタニズムを基本とする農村と小さな地方都市に代表されるものであり、基本的に反知性主義的なものであるという。それが反対するものは、大都市的かつコスモポリタニックな文化、抽象的諸概念、さらにはダーウィニズム、マルクス主義、フロイト主義などの新しい思潮、そして非プロテスタント教徒、非アングロサクソン系である¹³⁾。そうしたとき、ユダヤ系の知識人がその出自と思想内容から、この「敵」としての要素を特に多く保持していることは自明である。つまり彼らはアメリカにおいても異質な外部的存在つまり他者であった。

移民が増加し始める一八五〇年頃にはすでに、古きアメリカの伝統を維持しようとする動きが活発化し始めていた。一八四九年には、公的な移民排斥主義者の「アメリカ党」American Party(別名 Know-Nothing)が結成され、また一八六五年には、テネシー州で白人中心の排外的ナショナルリズムの秘密結社「クー・クラックス・クラン」Ku Klux Klan (KKK)が組織されている。

このような移民流入に対する一連の反発あるいは統一性志向の風

潮(一般的に Nativism と呼ばれる)は、具体的に一九二四年制定の移民制限法(「一九二四年法」)に結実し、ワスプ系ナショナルリズムの流れが制度的に確立したのである(ニューヨーク知識人の多くはこの時期に生まれ育っている)。このようなナショナルリズムがもつと極端な形で現れたのが五〇年代の「赤狩り」すなわちマッカーシー旋風である。

赤狩りの舞台は、連邦議会上院の「非米活動委員会」であった。ソ連の核保有、朝鮮戦争勃発などを契機に冷戦体制が強化されるなか、多くのリベラル派知識人が共産主義者すなわち「悪魔の手先」として追及されることになる。ここで注意すべきは、この委員会がその名のとおり「アメリカ的でない活動」の摘発糾弾を目的として設立されたことである。アメリカ的でない要素を多く有する、ユダヤ系のニューヨーク知識人にとって、この事態への対処は焦眉の問題であったことは間違いない。しかし彼らのほとんどは災禍を恐れて、この事態を静観することを選択した。さまざまな偶然が重なることによって、幸いにもニューヨーク知識人たちは結果的には難を逃れることができた。最大の要因は、彼らが三〇年代に共産党からすでに離反しており、左翼出身であるとはいえ反ソ的な立場からの東側に関する貴重な情報源としての有用性の方が重んじられたためである。冷戦の成立が逆に彼らを救ったともいえるだろう¹⁴⁾。

むしろ、ユダヤ系知識人のなかには冷戦の政治状況に積極的

適応する者も多く出てくる。ニューヨーク知識人を代表する文芸批評家ライオネル・トリリングは一九五二年の時点ですでにこう書いている——「知識人がこれほど権力と関連をもったことは、おそらく歴史上かつてなかったであろう。そしていまや、知識人自体が一種の権力となってしまったのである¹⁵⁾。これは知識人を取り巻く環境の急激な変化に対するトリリングの戸惑いである（一九四八年にコロンビア大学で最初のユダヤ人英文学教授に就任したトリリング自身、一九三六年の時点では「ユダヤ人、マルクス主義者、フロイト主義者」という理由で講師契約更新を断られた経験があった）が、同時にこのときの彼の感懐は現在のアメリカ政治の状況を予見しているともとれる。つまり、ブッシュ政権と「ネオコン」（新保守主義者）との密接な関係である。

ネオコンと総称される知識人集団はその多くがユダヤ系で、しかも系譜的には八〇年代にレーガン政権のブレインとして活躍したアーヴィング・クリストルやノーマン・ポドレツなどのニューヨーク知識人右派（当時すでに彼らは「新保守主義者」と呼ばれるようになっていた）の流れを汲む。現在のネオコンを代表する一人ウィリアム・クリストルは上のアーヴィングの息子でさえある。半世紀前ならディアスポラのユダヤ人として周辺的存在でしかなかった彼らは、いまやアメリカの保守政治の中核に関わる存在にまでなってしまったのである。

これまで見てきたように、ユダヤ系の知識人たちは一九世紀の

ヨーロッパから二〇世紀のアメリカにいたるまで、自らの特殊性ないしは他者性を克服せんがために普遍主義に傾倒してきた。それはディアスポラの民であることの宿命であったともいえよう。しかし、権力の中核に入り込んだユダヤ系知識人は、いまや自らの普遍主義をアメリカの普遍主義に同一化し、「アメリカ的信条」（民主主義、平等、自由など）を振りかざしながら、「世界帝国」さえも目論む集団と化している。これは大きな逆説といわなければならない。

多民族・多人種国家であるアメリカにとって、単一の民族や血によるナショナリズムは自己矛盾である。であるがゆえに、アメリカ国民統合の紐帯は「アメリカ的信条」に代表される普遍主義的理念や星条旗などの非人格的象徴でなくてはならない。ノーマン・メイラーはネオコンを非難して彼らを「星条旗保守主義」flag conservativeと呼んだ¹⁶⁾。これを言い換えて、「星条旗ナショナリズム」と呼ぶこともできるだろう。

しかし、アメリカ・ナショナリズムのイデオログになりお世話したネオコンにも落とし穴がないとは限らない。ネオコンは確かにブッシュ政権の頭脳だが、大統領選で多数票を集めているのは福音主義のキリスト教原理主義者たちであり、彼らは元来反ユダヤ主義的感情を抱いている。社会宗教としてのアメリカ・ナショナリズムは必ずしもディアスポラのユダヤ人たちにとって安全なものであるとは言い切れないのである。

- (1) Ramin Jahanbegloo, *Isaiah Berlin en Tortes Libertes* (Paris : Fern, 1991). I・ブルーリン・R・ジャン・ヌンツロー『あゝ思想史家の回想』(河合秀和訳、みすず書房、一九九三年) 六〇頁。
- (2) Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism: Part Three Totalitarianism* (New York : Harcourt, 1951, 1968). アンナ・アーレント『全体主義の起源』(大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、一九九〇年) 二二頁。
- (3) Enzo Traverso, *Les Marxistes et la Question Juive : Histoire D'un Debat 1843-1943* (Paris : La Breche, 1990). エンツォ・トラヴェルソ『マルクス主義者とユダヤ問題——さび論争の歴史(一八四三〜一九四三)』(宇京頼三訳、人文書院、二〇〇〇年) 一八五頁。
- (4) フーレント、xxx頁。
- (5) ジャハン・ングロー、一二四〜二八頁。
- (6) Norbert Elias, *Studien über die Deutschen : Machtkämpfe und Habitusentwicklung im 19. und 20. (Frankfurt : Suhrkamp, 1990)*. ノルベルト・エリクス『ドイツ人論』(青木隆嘉訳、法政大学出版局、一九九六年) 一七一頁。
- (7) カール・マルクス『ユダヤ人問題によせて』(ヘーゲル法哲学批判序説)(城塚登訳、岩波書店、一九七四年) 六二頁。
- (8) Isaiah Berlin, "Nationalism : Past Neglect and Present Power." *Partisan Review* 46, 3 (1979) : 352-3. 引用文の訳文は、以下の本の福田歓一氏の訳を必要に応じて変更しながら利用させていただいた。福田歓一・河合秀和編『思想と思想家——バーリン選集 1』(岩波書店、一九八三年)。
- (9) Berlin, 349; エリクス、二七七頁。
- (10) E. J. Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780* (Cambridge : Cambridge University Press, 1990) 120-21.
- (11) エリクス、三六二頁。
- (12) Alfred Kazin, *A Walker in the City* (New York : Knopf, 1978) 9.
- (13) Richard Hofstadter, *Anti-Intellectualism in America* (New York : Knopf, 1963) pp. 42-43.
- (14) 堀邦維『ニューヨーク知識人——ユダヤの知性とアメリカ文化』(彩流社、二〇〇〇年) 二二〜二三五頁。
- (15) Lionel Trilling, "Our Country and Our Culture," *Symposium*, *Partisan Review* 19, 3 (1952) : 320.
- (16) Norman Mailer, "Only in America," *New York Review of Books* 1, 5 (2003) : 50.

(はり・くに) 英米文化・ユダヤ文化。

日本大学教授)